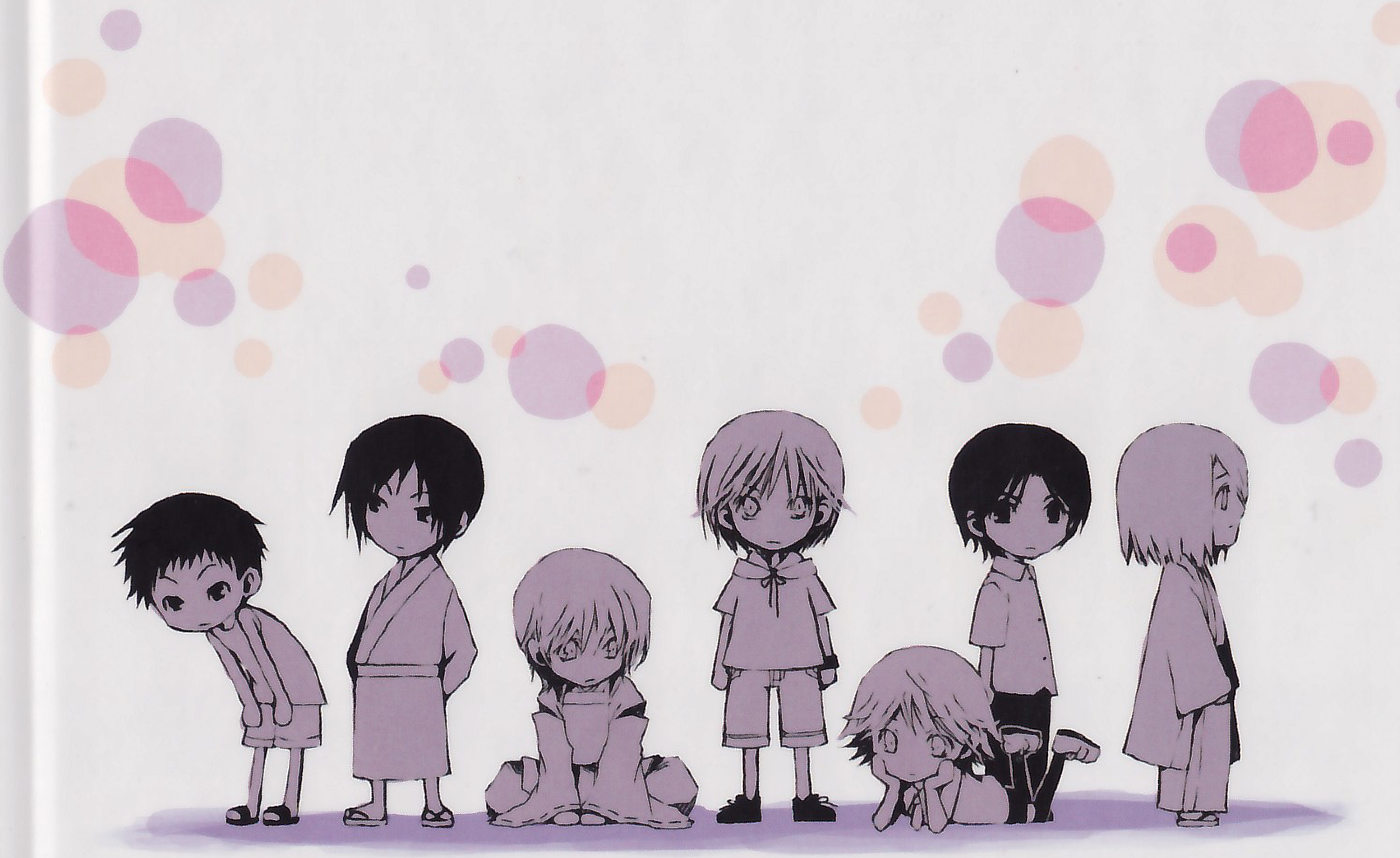
なれたらいいのに

# なれたらいいのに



# なれたらいいのに

水の旋律２～緋の記憶～

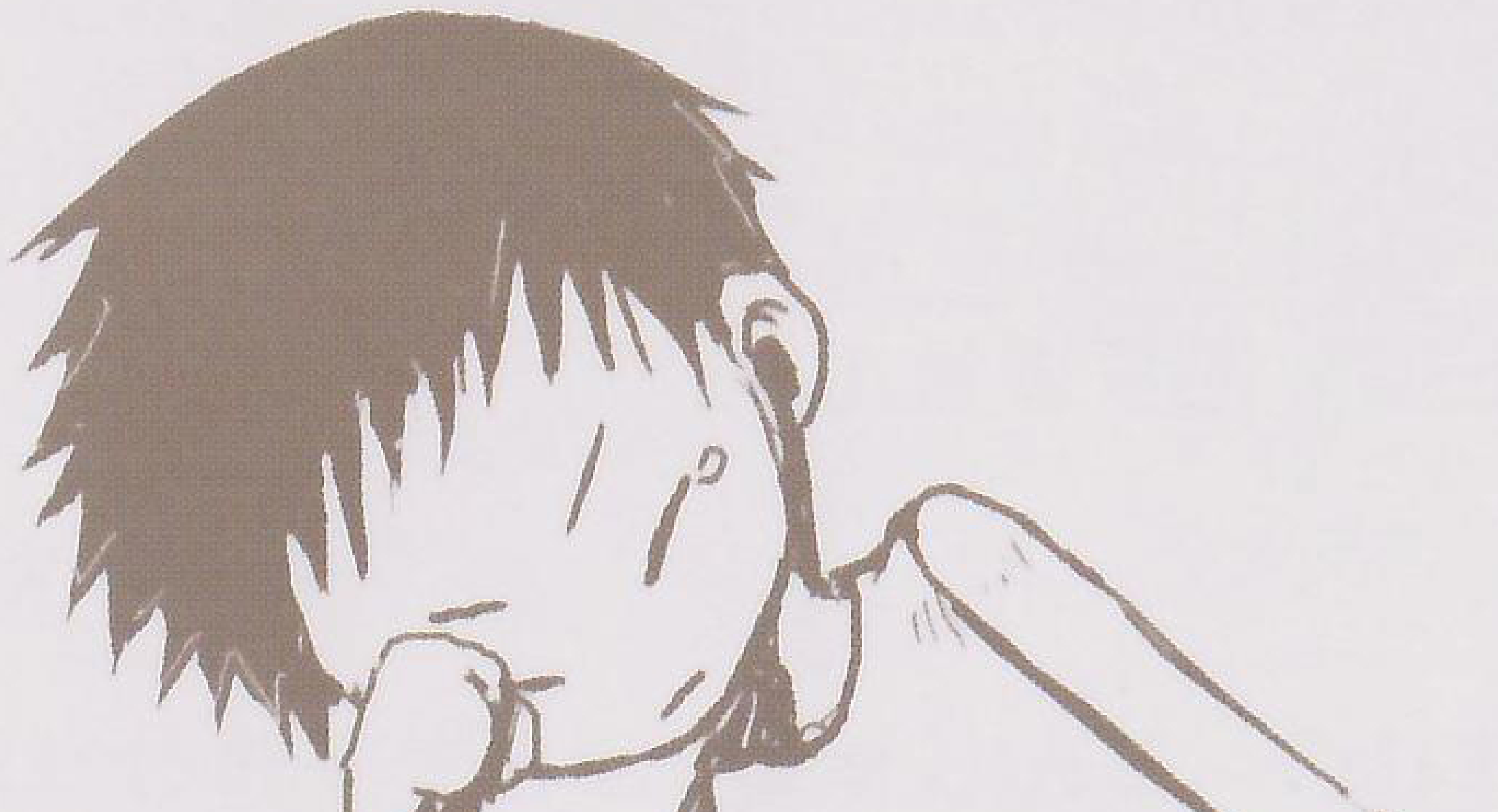
同梱絵本

もくじ

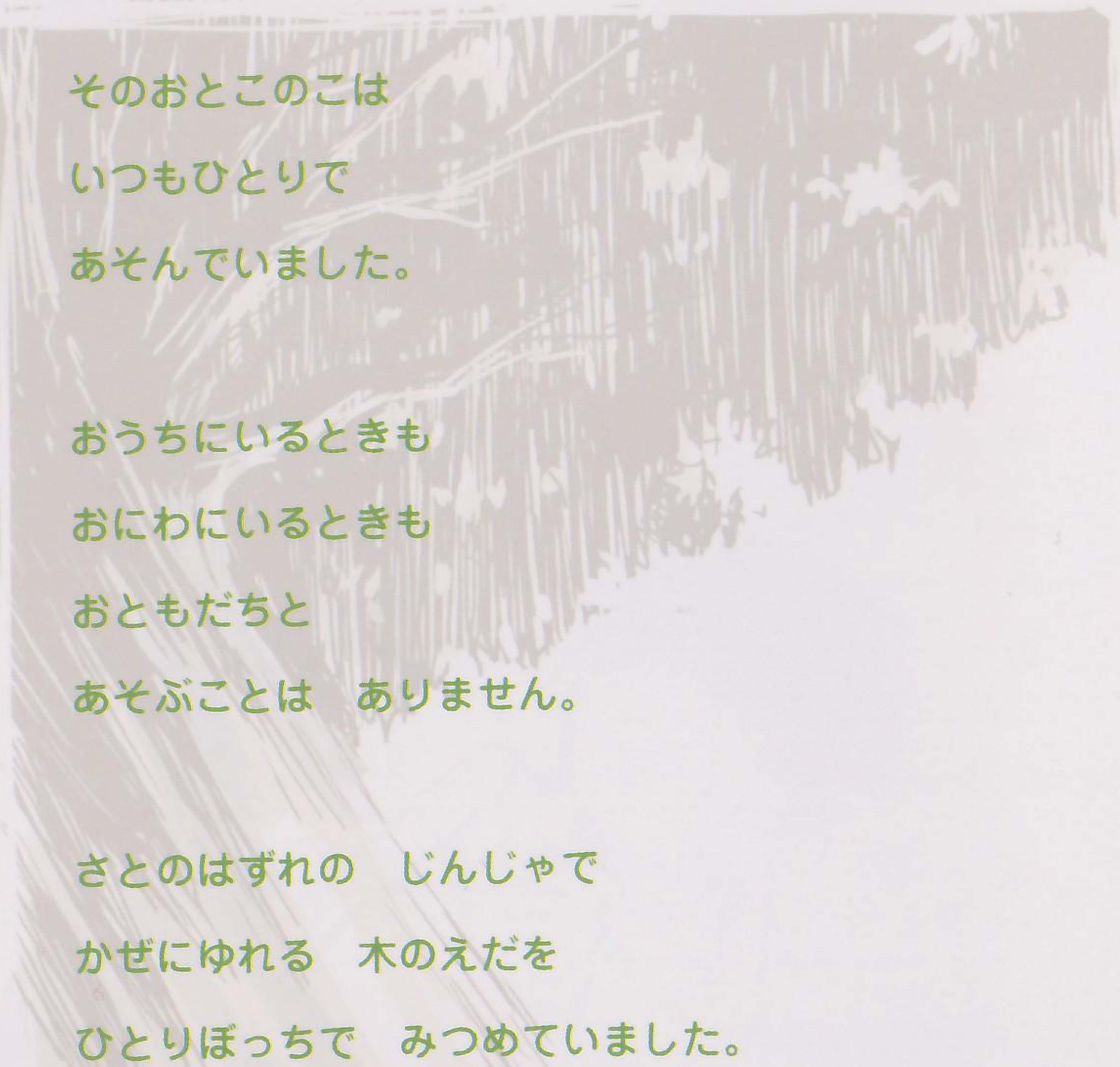
木になれたら …………………… 3
空になれたら …………………… 9
星になれたら …………………… 15
魚になれたら …………………… 21
花になれたら …………………… 27
石になれたら …………………… 33

さしえ：ひだか　なみ

# 木になれたら



もちづき　ゆえ



そのおとこのこは
いつもひとりで
あそんでいました。

おうちにいるときも
おにわにいるときも
おともだちと
あそぶことは　ありません。

さとのはずれの　じんじゃで
かぜにゆれる　木のえだを
ひとりぼっちで　みつめていました。

さみしくて

おともだちがほしくて

ゆうきをだした　おとこのこは

ほかのこどもに　こえをかけます。

けれど、だれも

へんじをしてはくれません。

「おまえなんか

なかまにいれてやらないぞ」

そういって　ほかのこどもは

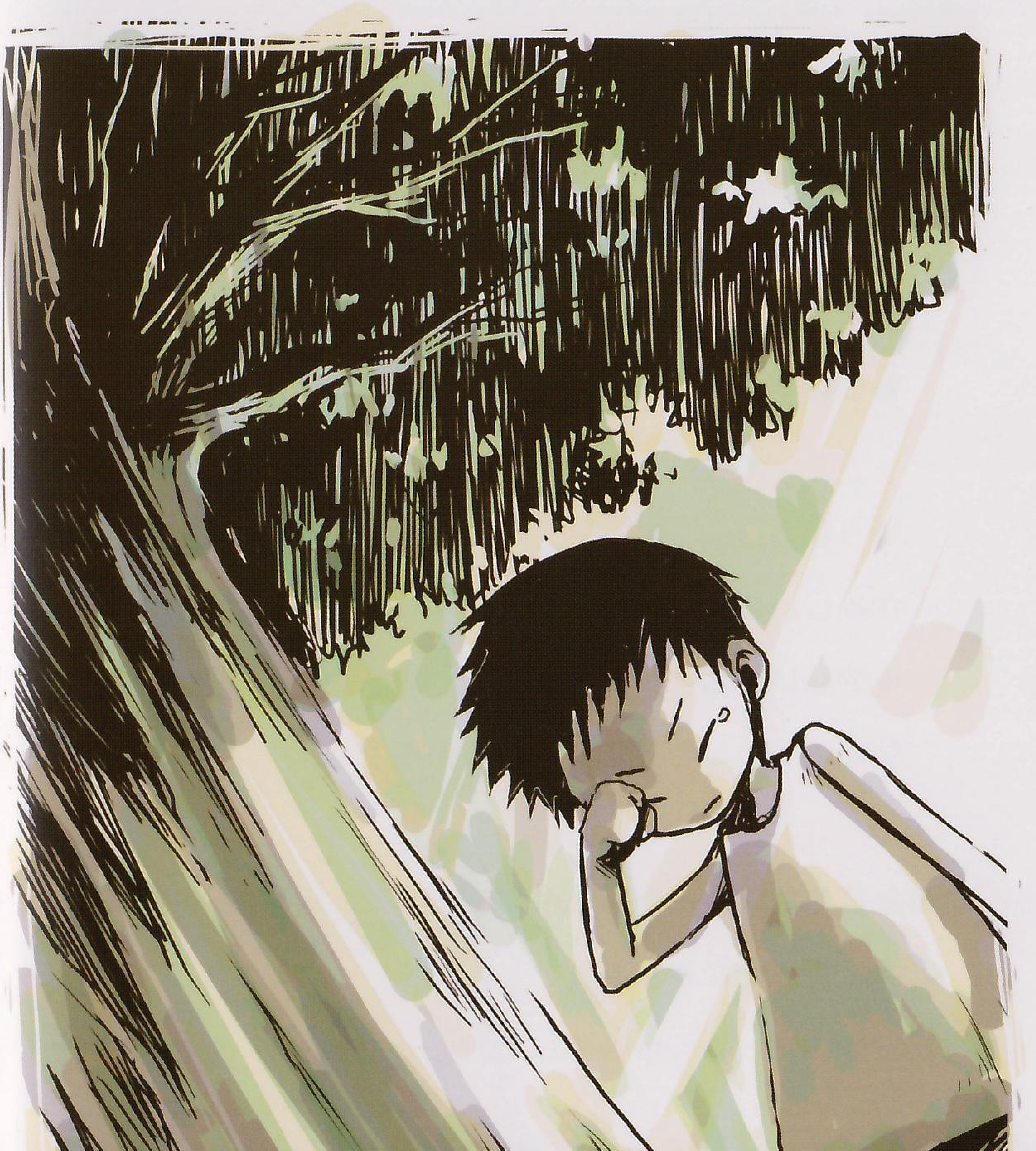
にげていってしまうのです。

# 木になれたら

さとのはずれで
おおきな木をみあげて
おとこのこは　つぶやきました。

「ああ、ぼくも
この木のように
なにもきこえず
なにも　かんじることが
なければいいのに

そうしたら
ひとりぼっちでも
おともだちが　いなくても
さみしいなんて
おもわないのに」

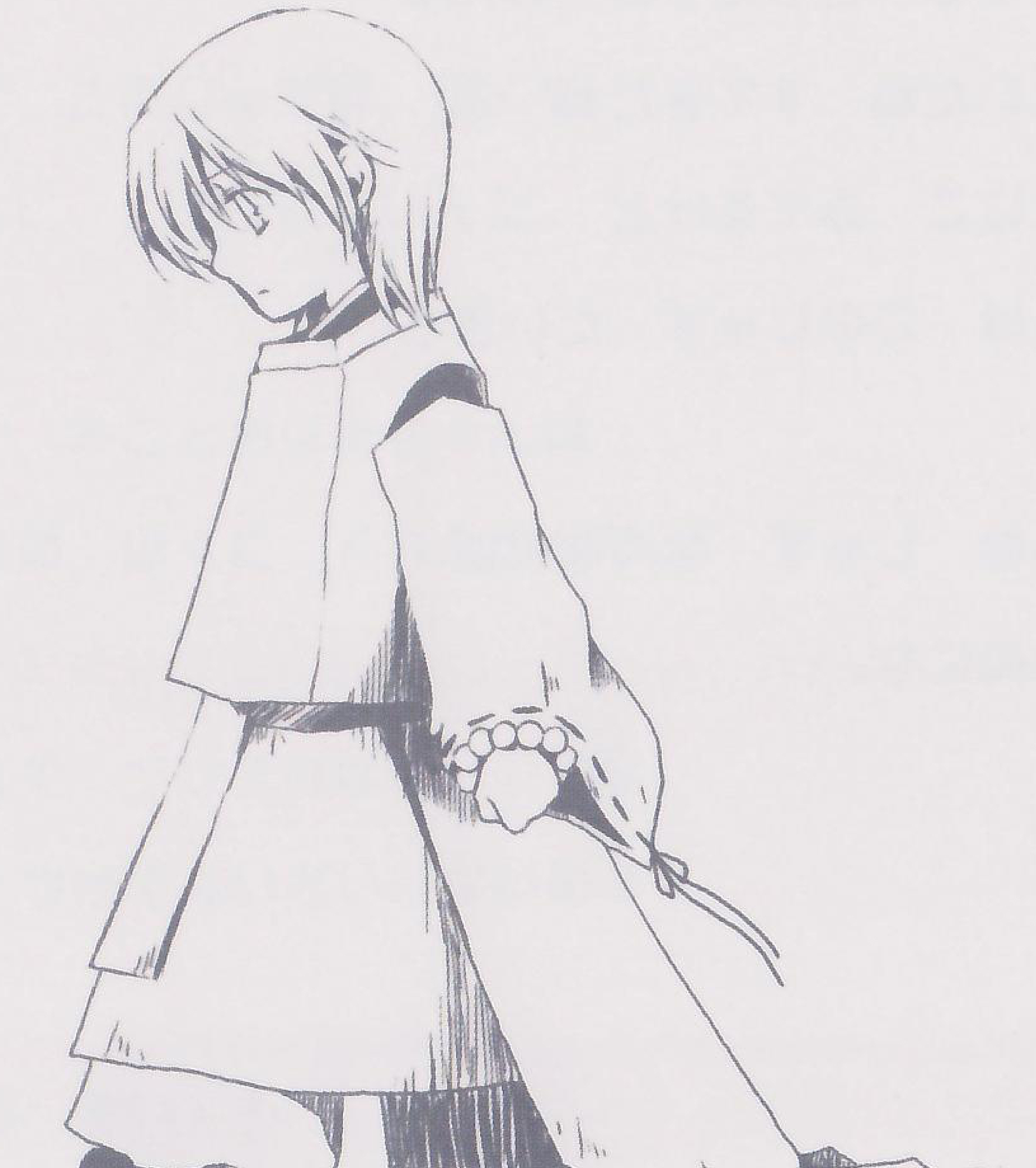

nh.

「もしつぎに　うまれてくるなら
ぼくは　この木になりたい
みどりのはを　ひろげて
しずかにたっている
もりの木に　なりたい

そうしたら
さみしいのも
くやしいのも
なんにも　しらずにいられるから」

おとこのこは　そうつぶやいて
ほほにおちたなみだを
てのひらで　ぬぐうのでした。

# 空になれたら



かじわら　ゆうき

ぼくのてに　きれいなそらいろの
じゅず。

いつも　ぴかぴかと　ひかってる。

まわりの　ともだちは　みんな
きれいだね　すてきだね　と
にこにこ　みてるけど
ぼくは　このじゅず　だいきらい。

こんな　じゅず　なくなれば
いいのにな。

だって　このじゅずは　ぼくを
じゆうに　してくれないんだ。

なんで　みことおばあちゃんは
こんなの　ぼくに　くれたのかな。

いつまで　つけてればいいのかな。
ずっとつけてないといけないの？

ぼくが　きいても
おばあちゃんは　いつもにこにこ
わらってるんだ。

「このじゅずは　おまえの
おまもり。だから　だいじに
つけておいで」

おばあちゃんは　おひざのうえで
やさしくあたまを　なでてくれる。

だいすきな　おばあちゃん。

でも、こんなじゅず
ぼくは　いらないよ。ほしくない。

uh.

ぼくは　ずうっと　このまま
おそとにでれないのかな。

この　きのうえよりも
もっともっと　たかいところから
いろんなまちを　みたいなぁ。

あの　おおきな　そらになって
ゆらゆら　ゆらゆら
おひさまと　いっしょに
おでかけできたら　いいのにな。

# 星になれたら

かわばた　みどり

そのおとこのこは、
うまれたときから
おとうさんが
いませんでした。

おとこのこのおとうさんは
おとこのこが　まだ
おかあさんのおなかに
いたころに
しんでしまったからです。

そのことをしらない
おとこのこは
あるとき
おかあさんにたずねました。

「どうしてぼくのおうちには
おとうさんが　いないの？」

おかあさんは　いきをのみ、
つらそうなかおをしましたが

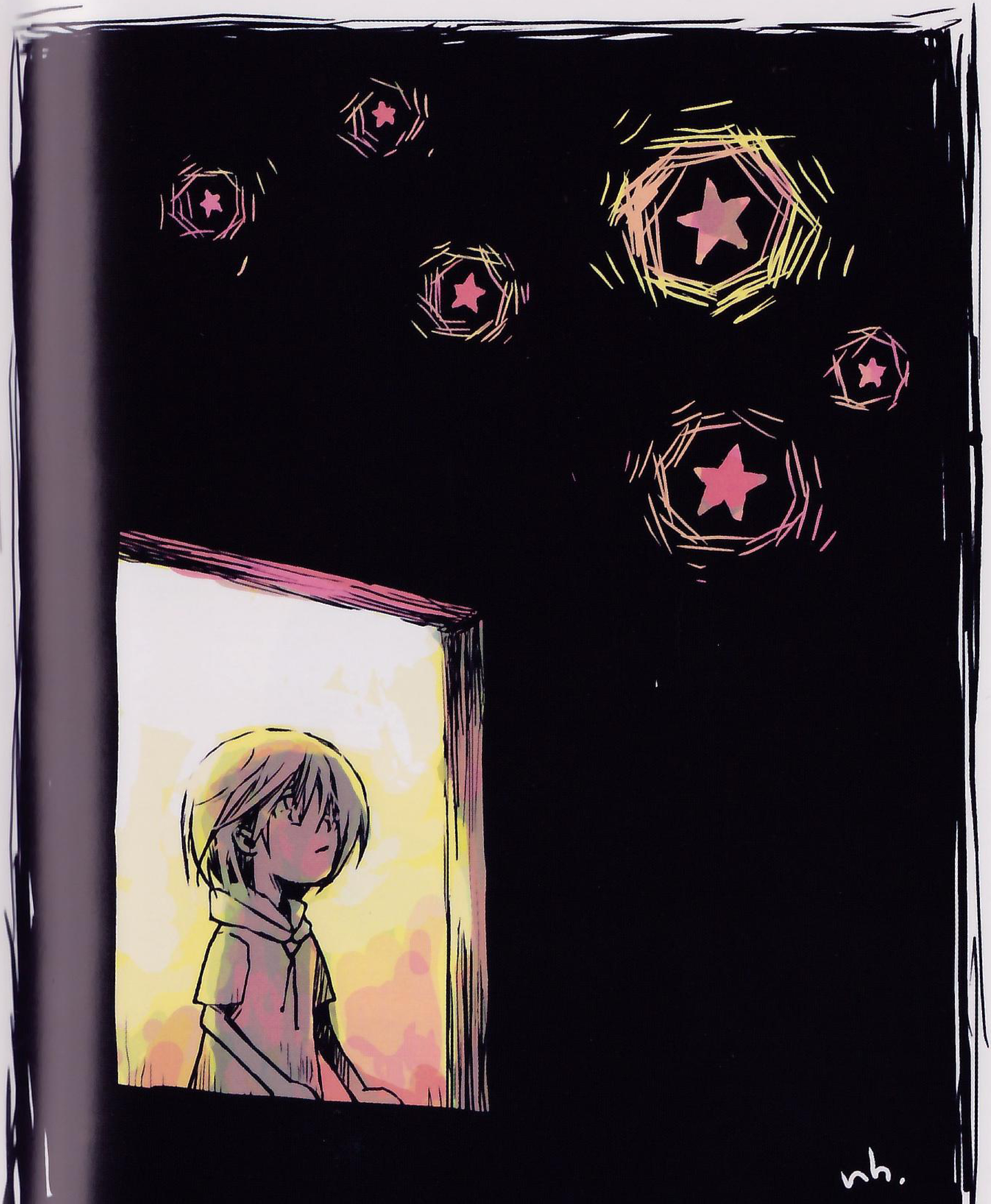
おとこのこのてを
にぎって
こういいました。

「おまえのおとうさまは
わたしたちを　まもるため
おほしさまに　なったのよ。

だから　どんなときでも
おそらから　わたしたちを
みまもってくださるの。

わたしたちが
おとうさまのゆめを
かなえることが　できるように」

そういったあと
おかあさんは　また
じぶんのへやに
こもってしまいました。


nh.

おとこのこは
おへやのまどをあけ
たくさんの　おほしさまが　かがやいている
よぞらを　みあげると
こう　つぶやきました。

「ぼくも　おほしさまに
なれたらいいのに。
そうしたら　まいばん
おとうさんに　あえるのに」

おとうさんのねがいが
いちにちも　はやく
かなうようにと

おとこのこは
まいばん　まいばん　よなかまで
ほしを　みつめつづけました。

# 魚になれたら

かじわら　ゆうき

あるひ　なかよしのきょうだいが
いつもとおなじように
ちかくのぬまに　やってきました。

きょうだいは　さかなをつっては
おおきさをくらべたりして
なかよくきょうそうをしていました。

「きょうは　まけないからな」

「ぼくだって　まけないよ」

にこにこ　にこにことと
たのしくつりを　していました。

ところが、おとうとがとつぜん
あしをすべらせて
ぬまに　おちてしまいました。

うごけばうごくほど
どんどん　ぬかるみに
はまってしまいました。

「おにいちゃん　たすけて」

「まってろ　いまたすけてやる」

あには　おとうとをたすけようと
まよわず　ぬまに　とびこみました。

おとうとの　ちいさなからだを
かかえた　あには
いっしょうけんめい　てあしを
うごかして　きしにむかいました。

ぐったりとした　おとうとの
からだは　どんどん　どんどん
おもくなっていきます。

「けいだけでも　たすけなくちゃ」

あには　ちからをふりしぼって
およぎますが、からだがなかなか
まえにすすみません。

「いま　ぼくが　おさかなだったら
すぐに　たすけられるのに。
かみさま　けいを　たすけて」

uh.

すると　あにのきもちが
とどいたのか　まるでせなかから
おさかなのひれが　はえたみたいに
ぐんぐん　ぐんぐんと
からだが　まえにすすんで
きしに　たどりつきました。

「おにいちゃん　ありがとう」

と、なきじゃくる　おとうとを
しっかり　だきしめてやりながら
ああ、よかった　と、ほっとすると
おさかなになりたい　とおねがいしたことは
すっかり、わすれてしまいました。

そして、それからは　なぜか
かわにすむ　おさかなを
たべられなくなっていたのでした。

# 花になれたら

にまいどう　おうき

そのおとこのこは
はやしのなかで　あしをとめて
ふぅ、とためいきをつきました。

やまから　ふいてくるかぜが
このはを　さらさらと　ゆらしています。
ここにくるときには
すてきなおとに　きこえたのに
かえろうとしている　いまは
そのおとが
みみざわりで　しかたないのです。

それは　きっと
ちゅうしゃのせいでした。

そのおとこのこは

ちいさいころから　ずっと

いっしゅうかんに　いちど

ちゅうしゃを　うってもらわなければ

いけない　からだでした。

おとこのこは

ちゅうしゃが　きらいでした。

いたいからでは　ありません。

ちゅうしゃをうったあとは

からだがだるくなって

いつもは　だいすきな　ものさえ

なんだか　どうでもいいものに

かんじられて　しまうからでした。

だるいのをがまんして
あるきだそうとして
おとこのこは　ふと
あしもとのひだまりに
はながいちりん　さいているのを
みつけました。

そのはなは　げんきよく
てんにむかって　あかいはなを
さかせていました。

uh.

「ぼくも　こんなふうに
みちばたにさいている
なもない　はなに
なれたら　いいのに。

たいようのひかりをあびて
あたたかい　ところで
ささやかな　はなをさかせる
そんな　はなに」

そんなことを　つぶやいて
やがて　あきらめたように
おとこのこは　また
あるきはじめるのでした。

# 石になれたら

にまいどう　おうき

そのおとこのこは
くびにさげた　いしを
ぎゅっと　にぎりしめました。

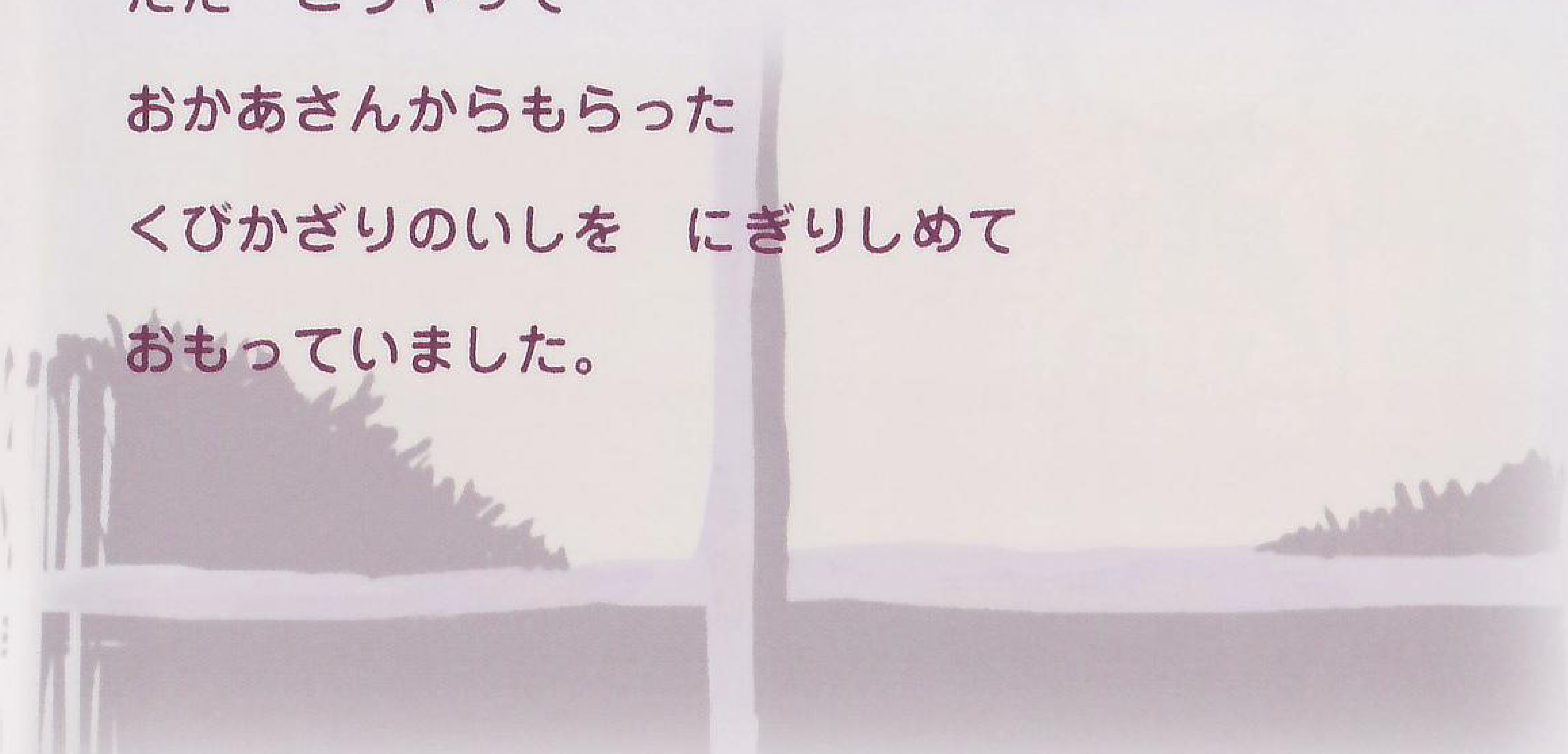
あまりにつよく　にぎりしめたので
おとこのこの　てのひらに
つめが　くいこんで
ちが　にじみました。

ちの　いろは
おとこのこが　みてしまった
おそろしい　じょうけいを
おもいださせました。

それは　しらない　おとこたちが
とつぜん　いえに
やってきた　ひのことでした。

それを　きっかけに
おとこのこの　おとうさんは
おかあさんのからだを　きりさき
ちにうえた　けだものに
かわって　しまったのです。

おとこのこは　なきませんでした。
ただ　こうやって
おかあさんからもらった
くびかざりのいしを　にぎりしめて
おもっていました。



「このまま　ぼくも
このいしに　なれたらいいのに。
すべてを　わすれて
ずっと　ねむっていられる
いしに　なれたらいいのに」

もしかしたら　おとこのこは
そのねがいを　かなえることが
できたかも　しれません。
いしに　なることはできなくても
いしのように　いきることは
できたかも　しれません。

けれど　おとこのこは　どうしても
その　くやしさを
その　かなしみを
わすれることが　できませんでした。

だから　いしにはならないと
おとこのこは　きめました。

そのかわりに。
ふしあわせをはこんできた
あの　おとこたちに　かんけいする
あらゆるものを
にくみながら　いきることにしたのです。

それでも　おとこのこの　くびには
いしが　かがやいて　いました。

おとこのこの　さいごの
きぼうの　ように。

水の旋律２～緋の記憶～公式サイト
http://www.kid-game.co.jp/kioku/


# なれたらいいのに

水の旋律２～緋の記憶～初回同梱絵本

| | |
|---|---|
| **発行日** | 2006年10月26日 |
| **発行** | 株式会社 キッド<br>〒140-0011<br>東京都品川区東大井2-13-8 ケイヒン東大井ビル6F |
| **本文レイアウト** | 株式会社 マイクロハウス |
| **印刷** | 株式会社 ミニカラー |



※本書の無断複写（コピー）は、著作権法上での例外を除き禁じられています。
無断転載もこれを禁じます。

SLPM 66531